

# 米子高専-東日本大震災発生下の 留学生受入れと国際交流

米子工業高等専門学校校長 齊藤 正美

Masami Saito

西暦 2011 年は、我々日本人はもちろん、日本への留学生にとっても生涯忘れられない年になるだろうと思われる。東北地方を襲ったマグニチュード 9.0 の大地震と最大高さが 20 メートルを超えるだろうという大津波による未曾有の大被害、それに続く福島原子力発電所の放射能漏れ事故の発生と多数の住民の避難など、これ以上はないと思われるほどの災厄が現実のものとなったからである。このような事態が被災地の教育関係事項にも様々な影響を及ぼしていることは周知のことであるが、その中のひとつに（社会問題としてあまり目立たなかったが）東日本の高専への留学を予定していた東南アジア学生の渡日延期や配属先変更という事態が起こった。このようなことは今後めったに起こることではないと思われるので、まずその間のできごとを国立高等専門学校機構の報告に基づいて簡単に述べておきたい。

被災した高専は東北、関東地方を中心に 12 校あり、地震発生時の在籍留学生は 117 名であった。災害が大規模であったことと学校が春休み中であったため状況確認は必ずしも容易ではなかったが、幸いにも 3 月 22 日までには全員の安全が確認できた。また原発事故による放射能被害の深刻さが懸念されたため、マレーシア政府派遣留学生の編入学予定者についてはマレーシア政府から渡日許可がおりず、日程が延期された。地震被害や原発被害がもっとも大きかったのは一関高専、仙台高専、福島高専であったが、この 3 校への編入学予定者は国費留学生 6 名とマレーシア政府派遣留学生 6 名であり、これらの留学予定者に対しては文部科学省に相談のうえ配属校変更の措置がとられた。さらに、マレーシア政府の方針によって、福島原子力発電所から半径 80km 以内にいる学生は転学させることとなり、福島高専に在籍するマレーシア政府派遣留学生 5 名の転学の調整が行われた。なお、同高専に在籍していた国費留学生 2 名のうち 1 名は本人の意思により転学することとなった。東日本大震災発生後ほぼ半月間にわたる高専留学生についての動向は概略以上のものである。

このような流れの中で、震災対応措置の一環として、一関高専（物質化学工学科）へ編入学する予定であったラオスからの国費留学生 1 名を、物質工学科のある米子高専が受入れることになった。本学生は地震発生直後から配属先変更のため東京で待機していたが、3 月 26 日に米子高専行きが告げられ、その 2 日後に米子に到着した。幸いにも、米子市はラオスの生まれ故郷の自然環境によく似ていて愛着がもてるということから本人から聞き、受入れ側として安堵した次第である。また、本校では今年 3 名のマレーシア政府派遣留学生と上記学生以外の 2 名の国費留学生（スリランカ、モンゴル）も受入れ（計 6 名）、たいへん賑やかで充実した年となった。マレーシアからの留学生は、当初 4 月末までは許可が出ないかと思われたが、実際には 4 月 9 日に渡航許可がおりてその翌日に来日し、授業開始にほとんど影響が出なかったことが不幸中

の幸いであった。いずれにしても、今回の大震災、中でも原発事故はこれらの留学生にも大きな精神的影響を及ぼし、これまで原発賛成であった多くの学生が原発不要論を唱えるようになったということも事実である。多少大げさではあるが、このようなことが将来の我が国の国際関係や経済関係に影響を及ぼすかも知れないことを懸念している。

当のラオスからの国費留学生は、4月5日の米子高専での入学式に臨み、この春移り住むはずであった被災地のことを案じながらも、今後の勉学に対する意欲を力強く表明した。米子高専で3年間学んだ後は、日本の大学・大学院に進学し、立派な研究者となって国に帰りたいとのことである。このような経緯で同留学生在が本校の一員となったことは、たまたま本校に物質工学科が存在したと学寮の部屋に空きがあったことが幸いしたからといえるが、国際交流はまず留学生との関係からという本校の教職員・学生の考えと雰囲気も後押しをしたと考える。地元の新聞等もこのことを大きく取り上げ、暖かい目で彼の門出を祝福してくれたことも合わせて記しておきたい。

さて、米子高専における留学生の受入れは1986年から始まり、その後毎年1~6名を新規で継続的に受入れている。彼らの出身国は、マレーシア、中国、タイ、バンラデシュ、フィリピン、チュニジア、カンボジア、モンゴル、ケニア、ラオス、スリランカ、インドネシア、コロンビア、ベトナムなどであり、常時5~11名が寮生活を送りながら勉学に励んでいる。この数は全国高専の中で必ずしも多い方ではないが、留学生のおかれている学習環境、学校の対応と教育の基本方針、学内外における留学生交流事業等に関しては他高専と大きな差はない。高専留学生への支援体制、留学生の生活、日本人学生や地域社会との交流事業などについては、すでに本誌2004年12月号の「長野高専における留学生の受入れ」記事の中でよく似た事例が紹介されているので重複は避ける。同年は国立高専の独立行政法人化が始まった年であり、その時から7年ほどが経って、交流事業等の内容が幾分多彩になってきた感がある。例えば、中国地区高専が2010年度から連携事業として行っている「留学生交流シンポジウム」事業では、高専留学生と日本人学生が工業や国際化に対する思考を英語で討論し、さらには各国の留学生との交流を通じて、国際語によるコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力など国際的技術者としての能力を身につけることを目的として実施されている。つまり、従来から1高専単位で行ってきたような交流活動だけではなく、地区単位あるいは全国規模での連携事



ウ・スクサワンさん(19)。昨年4月に来日して東京で日本語を習得した後、今年4月から一関高専物質工学科に編入する予定だった。しかし、同高専が半壊して受け入れが困難になったことから、3月末に同じ物質工学科がある米子高専3年に編入が決まった。震災時は東京にいたというパンパスワさん(23)は「ラオスではほとんど地震がないので怖かった。何もできないけど、被災者の方たちが学式が行われる、早く元の生活に戻れる

「編入先被災のラオスの留学生が米子高専へ」を報じる日本海新聞記事(2011年4月6日)

業という形で、経済のグローバル化に対応できる技術者の資質・能力の育成という明確な教育目的をもって留学生交流事業を捉えなおすことが始まっている。高専留学生を対象としたこのような交流事業は、海外インターンシップなどとともに今後の高専教育＝技術者教育のひとつの柱になっていくものとする。

そのような観点から、米子高専で最近実施した国際交流事業をいくつかあげたい。一つは、去る5月20日に行われたベトナム工科系大学生との交流プログラムである。これは、(財)日本国際協力センター(JICE)が実施している国際交流事業「二十一世紀東アジア青少年大交流計画」＝JENESYS プログラムの一環として行ったものである。本校を訪れたのは、ベトナム各地から選抜された工科系大学生14名と訪日団団長及び日本側関係者を含む20名であった。午前中は、歓迎式典ののち、一日を共に過ごすことになる専攻科学生とベトナム学生がペアになり、英語や日本語を交えながら自己紹介を行った。その後、校内見学や昼食会でより一層の親睦を深めたが、この行事には米子高専の全留学生11名も交流に加わった。午後からは、我が国におけるものづくりのルーツであり、かつ日本文化の代表でもある江戸時代の「からくり人形」のキット製作を行い、本校の学生とベトナム学生の二人一組で作り上げるという体験型交流を実施した。本校学生による英語による解説と幾種類かのからくり人形の実演を行ったのち、約3時間に及ぶ「段返り人形」の共同製作作業を行った。この催しは非常に盛り上がり、文化の相互理解や国際的なコミュニケーション能力の育成という面で大きな成果を上げることができたことはもちろんであるが、「グローバルな国際環境にも通用する技術者の資質・能力の育成」という教育目的を、日本人学生と本校留学生及びベトナム学生の共同参画という形で達成できたことに新しい意義があったと考えている。



JENESYS 事業に参加したベトナム学生と米子高専の学生・留学生（2011年5月20日）



からくり人形の共同製作に取り組むベトナム学生と本校専攻科の学生

二つ目は、南ソウル大学(2名は他大学)の学生20人との海岸清掃活動を通じた国際交流である。これは7月8日に米子市の弓ヶ浜海岸で行われた。引率してこられた同大学のアン・ビョンゴル准教授によれば、近年韓国、中国、ロシアなどから日本海沿岸に毎年多くのごみが流れてくるのが環境問題となっており、これを環日本海全体の問題と捉え、2006年度から同大学の日本語科の学生を中心に渡日・海岸清掃の活動を実施しているものである。米子高専では、同大学から昼食休憩場所の提供の依頼を



海岸清掃活動で交流を深める南ソウル大学の学生と米子高専の学生

受けた時、これを国際交流の良い機会と捉え、本校学生会に参加を呼び掛けたところ、30名もの学生が呼応してくれて実現した。韓国の学生たちと米子高専の学生たちは、ペットボトルや日用品などのゴミを拾って分別・改修作業を行いながら、地球規模の環境問題の重要性を共有しつつ、互いに日本語や英語による会話を交わしていた。残念ながら、1名を除いて留学生の参加学生はいなかったが、今後このような実体験型の国際交流活動は留学生にも是非必要と考えている。

三つ目は、やはり実体験型の国際交流の一例である。これは、(詳細は割愛するが)鳥取県北東アジア学術交流支援事業等との連携活動の中から出てきたものである。1993年に鳥取県日口協会からウラジオストク市に対してシベリア抑留死亡者の慰霊と両国の友好を願って平和祈念像(石仏)が贈られたが、破損がひどく、その後修復されて極東連邦大学の敷地内に安置されていた。この石仏に日本風の屋根を建設してほしいとの要望があったことを受け、関係諸機関との連携協力のもとに、米子高専建築学科の学生10名が本年8月から9月にかけて同大学の学生と共同して木造屋根を建設するという計画である。この事業は、本校の学生(残念ながら本年は建築学科には留学生がいなかった)にとって貴重な交流体験になるであろうと思う。

日本に来ている留学生の存在は、それ自体が彼らと日本人学生との重要な交流体験であるが、すべての留学生がコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力に長けているわけではない。とくに東南アジアからの留学生は、むしろ日本人学生以上にシャイで、おとなしい学生もたくさんいる。そのような学生に対しても、日本人学生とともに(日本人以外の人々との)国際交流体験を積ませることは重要なことである。とくに高専や大学工学部の場合は、国際的に活躍できるエンジニアの育成を目指す高等教育機関であることから、合わせて高度技術者としての資質や能力(エンジニアリングデザイン能力)を伸ばすことができるような国際交流事業を創り出すことができれば理想的である。